



東京理科大学と理窓会の共催で「卒業50周年祝賀会・式典」が10月27日に開催されました。神楽坂の学部・学科の1974年卒の同窓生120名余りの参加者がありました。11:00から式典、12:00から見学会、12:30から懇親会という3部構成になっていました。11月24日には野田キャンパスでも卒業50周年祝賀会が開催されたようです。

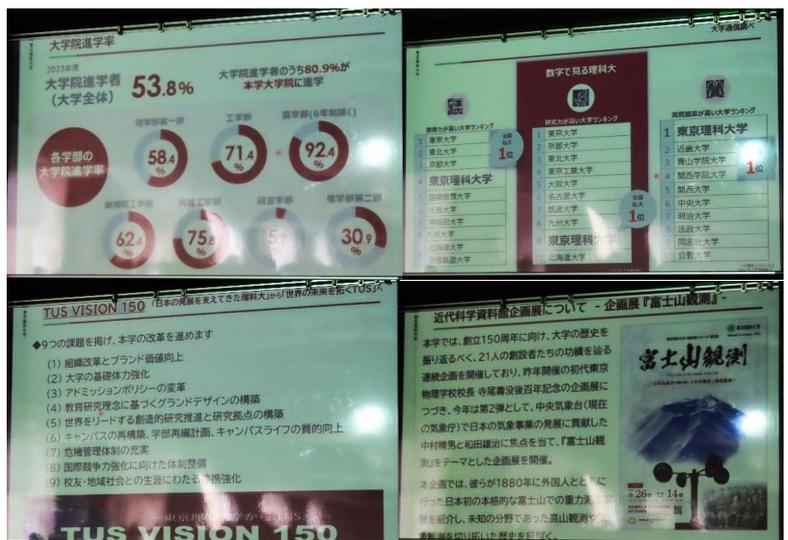
式典は、増淵忠行理窓会会長の開会挨拶から始まり、続いて浜本隆之東京理科大学理事長のパワーポイントを使つての講演「東京理科大学の現状」がありました。理科大の沿革から、2024年のキャンパス数4・7学部33学科・大学院7研究科31専攻・学生数20,193人、2026年に創域情報学部科学コミュニケーション学科開設予定、2023年大学院進学率全体で53.8%工学部71.4%、国家試験資格の取得（一級建築士117名・合格ランキング2位、他）、50年前との比較（志願者数・入学者数・学生数・土地面積等）、TUS VISION 150宣言（「日本の発展を支えてきた理科大」から「世界の未来を拓くTUS」へ）、数字で見る理科大ランキング（教育力:4位・全国私大1位、研究力:9位・全国私大1位、実就職率:1位）等々と、後で見学が設定されていた近代科学資料館での企画展「富士山観測」の紹介もありました。その後、卒業生代表として理学部第1部応用化学科杉浦雅美氏の挨拶、記念バッジ授与、学生サークル「和太鼓 樹」の演奏、校歌斉唱、9号館正面に移動して記念写真撮影をしました。



増淵忠行理窓会会長挨拶



浜本隆之理事長講演





杉浦雅美氏挨拶



記念バッジ授与



学生サークル「和太鼓 樹」演奏



記念バッジ

第2部は近代科学資料館の見学で、休館日でしたが特別に開けて頂いたようです。9号館正面外掘通りから1号館と6号館の間の通り（50年前にはなかったと記憶）を抜けて近代科学資料館へ移動しました。「東京理科大学 創設者シリーズ 第2弾、企画展『富士山観測』～日本気象学の礎を築いた中村精男と和田雄治～」の他、「大村 智（2015年ノーベル生理学・医学賞を受賞）記念展示室」等の見学ができました。地下1階の「数学体験館」は見られませんでした。



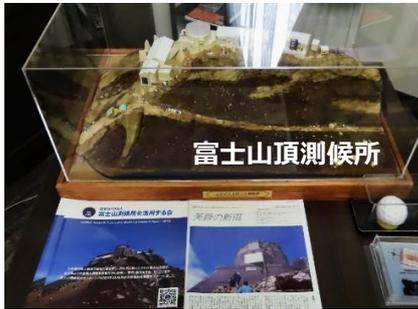
1・6号館間



近代科学資料館



奎運ホール ステンドグラス



富士山頂測候所

第3部は8号館の学生食堂での懇親会で、学科毎にテーブルが用意されていました。建築学科の懇親会参加者は3名でした。2泊3日で遠方から参加された方もあり、少人数ながら楽しいひと時を過ごすことができました。皆さんまだ仕事を続けられていて、互いに補完し合える情報等の交換もできました。

「出身地が一緒の建築学科の〇〇さんを誘ったのだが来なかった」とか、「△△さんは参加していないか？」等、他学科の方からの話し掛けもありました。「△△さんとは天文部で一緒だった」とのことでしたので、「彗星でも見に行っているのでしょうかね」とか「もうすぐ水星が太陽から一番離れますね」「来月はトルコ国旗のような三日月と金星が見られるそうですね」等、天文の話題でしばし歓談。数日後に石川県在住の〇〇さんからは、「建築学科3人の写真を見せてもらった」とのメールをもらいました。



建築学科

梅津さん



懇親会は3名

飯山 川上さん 河野さん



工学部  
建築学科



工学部  
建築学科

懇親会場を出たときに偶然一緒だった他学科卒の方を加えて6名で場所を移して2次会(?)。面識が無かった者どうして学生時代や出身地の話等々、会話が進むのも不思議な感覚でした。下の写真は応用化学科卒の方から頂いたものです。



数学科 応用化学科 数学科



# <付録> JR飯田橋駅西口より

「卒業後ほとんど大学に行ったことが無い」という方もいらっしゃるのではないのでしょうか。私も近代科学資料館に入館したのは今回が初めてでした。下の写真はJR飯田橋駅西口からの理科大です。変わってない様で、結構変わっています。駅構内も変わり、西口前に江戸城とその外堀に関する解説や「史跡 江戸城外堀跡 周辺案内図」等が掲示されています。神楽坂の商店街も変わっています。2025年1月23日(木)にPORTA 神楽坂の理窓会倶楽部で築理会の新年会が計画されています。少し早目にいらして、周辺の散策後に新年会に参加なさっては如何でしょうか。近代科学資料館も開館日で16:00まで開いています。東京の日没は16:59、一番早かった12月初め頃よりは30分以上遅くなります。



### 江戸城

The History of Edo Castle

江戸城は、平安時代末の江戸氏居館、室町時代の太田道灌、戦国時代の小田原北条氏の主城として受け継がれました。豊臣秀吉は、北条氏を滅ぼすと、江戸城を関東に移しました。1590(天正18)年、徳川家康は江戸城に入城し、江戸城と幕下町の建設を始めました。家康入城時の江戸城には石垣は土塁のみで、自比谷より江戸を流す荒川を築堤し、城下町を築きました。また、自比谷より江戸を流す荒川を築堤し、城下町を築きました。また、自比谷より江戸を流す荒川を築堤し、城下町を築きました。



### 江戸城外堀

The History of Edo Castle Outer Moat

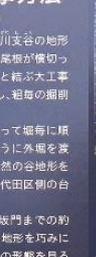
江戸城は、本丸・二の丸・三の丸の西の北の丸、吹上からなる内郭を内堀が囲み、その裏門が次手門でした。外堀は、権子橋門から時計回りに、一橋門、神田門、豊後橋門など諸門をめぐり、奥板橋門から荒川、荒川から四谷門、市谷門、半込門を経て、現在の神田川に入り、小石川門から築堤で、荒川に注ぎました。外堀工事は、1606(慶長11)年に権子橋から海老池までの堀を築き、1618(元和4)年に豊後橋が築成されて半川(現日本橋川)の流路に付け替えられ、神田川が誕生しました。この工事で、半川は堀の形で築成され、独立した堀となりました。1636(寛永13)年には、天下普請で外堀が築成され、江戸の堀構が完成します。この工事は、地子橋から荒川に至る外堀の堀石池化と新築築造を前田・堀川・池田・奥田など首領外様大名(石垣方六組)、半込土庫から赤坂土庫にかけての外堀堀削と土塁の築造を奥田大名(堀方七組)が行いました。



### 牛込・赤坂間の江戸城外堀の工事方法

The Way to Make the Outer Moat from Ushigome to Akasaka

牛込から赤坂にかけての外堀のうち、牛込一市谷までは、神田川支谷の地形を利用して造られました。次に四谷・麹町付近は、もともと台地の裾裾が険切っている地形であったため、台地を掘り込み、赤坂間の窪地の谷へ掘る大工事となりました。この区間の工事は、普請を担う各大名が堀を掘り、粗掘の掘削土量が一定となるように分担されました。外堀は、徳川幕府が最も高が高く、豊田藩より神田川に向かって堀毎に順に水位が低くなりました。そのため、牛込門(敷田橋西口)のように外堀を渡る土庫には堰が設けられ、堀の水位を調整していました。また、自然の谷地形を活かしながらも、城郭としての防衛効果を高めるため、現在の千代田区側の台地に土を盛って高い土塁を築き、高峻な土塁が形成されました。江戸城外堀は総延長約14kmを誇り、このうち牛込門から赤坂門までの約4km、面積約30haの堀が国史跡指定されています。史跡区域には、地形を巧みに利用して築かれた外堀が水たえる姿や、外堀門の石垣、土塁の形態を見ることができます。



### 外堀の変遷

The Transition of the Outer Moat

外堀は江戸城防衛の役割だけでなく、豊かな水辺空間として当時から江戸市民に愛され、名所館などの浮世絵にも多く描かれました。「名前江戸百景」(江戸・1856(安政3)年-1858(安政5)年)には、市ヶ谷八幡の門前が堀川に広がり賑わう景色が、外堀とともに描かれています。また、「富士三十六景」(広重・1858(安政5)年)には、御茶の水の屋敷下を、舟物を載せた船が往来する様子が描かれ、外堀が物資輸送路としても使われていたことがわかります。明治期以降も外堀は景勝地として受け継がれました。1893(明治26)年、地城有志者からの寄付金により、四番町より市谷田町に達する新道(現・新見附)開設工事が始まり、甲武鉄道延伸工事と一体で建設されることとなりました。1894(明治27)年に開通した甲武鉄道と外堀の風景は絵巻書などに多く取り入れられました。1911(明治44)年には、牛込から麹津までの土手遊歩道を江戸城外堀として永久に保存するため公園とすることが計画され、1927(昭和2)年に牛込橋から新見附までの区域が「東京市立土手公園」として開設されました。なお、甲武鉄道や近代の牛込遊歩道の変遷については、駅舎2階に解説板を設置しています。

